

湖の住人となって約百年の歴史をもつ十和田湖名産「ヒメマス」。湖の生態系の変化や水質の悪化による漁獲量の減少に、地元漁協や事業所、自治体や子供たちが連携して、往時の「ヒメマス」の復活を願い、十和田湖の水環境の再生に取り組んでいます。

十和田湖名産「ヒメマス」の復活に向けて取り組む湖の再生（小坂町）

100年の歴史、十和田湖の象徴魚「ヒメマス」

秋田青森両県の県境部に位置する十和田湖は、十和田八幡平国立公園内にあり、一重カルデラ湖として世界的に有名。満水時には標高400メートル、面積61・02平方キロメートル、周囲約40キロメートルになり、湖の最深部は326・8メートルと田沢湖、支笏湖に次いで日本第3位となっています。

十和田湖にはその昔大型の魚類は生息していませんでしたが、明治35年（1902年）養殖漁業の先駆者で、十和田湖開発の功労者の和井内貞行氏が私財を投じて「ヒメマス」の養殖をはじめたのが今から100年余り前のことです。

やがて、新たなふ化場の建設や養殖技術向上などにより、ヒメマスの養殖漁業が軌道に乗り漁獲量も増大、ヒメマスは十和田湖を象徴する魚、湖の名産になっていったのです。現在、ヒメマスのふ化事業は、時代の変遷を経て秋田県小坂町・青森県十和田市の漁師らで組織する「十和田湖増殖漁業協同組合」（組合員44名・小坂町和井内）に引き継がれています。

漁獲量減少はワカサギ・湖水環境の悪化にあり

ヒメマスの年間漁獲量は昭和50年代には30tから



「ダンシ網」に上げられ生き良く飛び跳ねる「ひめマス」

発荷峠から望む晩秋の十和田湖



50 七余りで推移、58 年には 60 七を記録します。この時代は、約 60 人いた漁師たちも生計を立てることができたとはいいます。

ところがその 2 年後の 60 年にはわずか 2 七台に激減してしまい、これを境に漁獲量の不安定な変動が現在まで続いています。

この原因として挙げられるのは、昭和 50 年代後半、湖に導入したワカサギの急増により、ヒメマスとの競合エサである大型の動物プランクトンが減少したため、60 年以降ワカサギの増減がヒメマスの個体数の不安定な変動を引き起こしているのです。また、十和田湖の水質は、



バスを降りて、遡上池に遡上する「ひめマス」を見学する観光客

かつて、最も厳しい環境基準（COD1 mg/l 以下）を達成しておりましたが、61 年以降はこの環境基準を達成できない状況が続きました。昭和初期には 20 メートルあったといわれる透明度も 8 メートルまで落ち込んだのは、長年にわたる観光排水、生活排水の流入が影響し、水質が悪化したものです。

これにより、湖底にはヘドロが堆積し、酸素を作り出す水草やエサとなる動物性プランクトンが減少したことも原因と指摘されています。

（秋田・青森両県では、昭和 55 年から十和田湖特定環境保全公共下水道事業により工事に着手し、平成 3 年 4 月から供用開始しています）

ヒメマス復活に向け地元漁協・事業所等が連携

十和田湖の象徴、名物であるヒメマスの復活に向けて十和田湖増殖漁業協同組合ではエサの競合するワカサギを捕獲適正処分し、動物プランクトンを増殖させて生態系の回復を図る取り組みを行っています。

平成 12 年からは同漁協と湖畔のホテル・旅館等の事業所や自治体と連携して、EM 菌（有用微生物群）を投入して水質改善活動を行ってきました。

また、同漁協は平成 14 年 12 月、ヒメマスの放流稚魚の



大きく成長したヒメマスの稚魚

安定的な生産・育成を図るため、国・県・小坂町・十和田市の支援を受け、老朽化したヒメマスのふ化場を全面的に改修整備

総敷地面積 9000 平方メートルにふ化棟、親魚池、稚魚池、遡上池、遡上路等の主な施設で構成され、新設・拡大・増設されたことにより飼育環境が整ったことにより、健全な大型稚魚（2・5g、5・5g）を安定的に生産・放流できるようになり、稚魚の生存率が高まりました。

さらに、湖と遡上池をつなぐ遡上路を併設し、遡上するヒメマスの観察が可能となることで児童の体験学習や珍しい観光スポットとして観光客などが訪れています。

生産した稚魚は、両県の地元小・中学生の協力を得て湖に放流され、これらを通じて地域の子供たちにヒメマス復活への試みや、十和田湖の水質浄化活動についての意識付けを図っています。

ヒメマスの復活は 十和田湖の再生にあり

十和田湖増殖漁業協同組合の小林義美会長は、ヒメマ

スの復活は、十和田湖の再生にあり。「近年、私たちが出した汚れによって湖が汚れたので、私たちの手で戻していきたい」と地元住民の環境意識が大きくかわった。この機運を大切に年月はかかるが次世代に向けて根気強く取り組んでいかなければならない」と話します。

現在、湖を見ると水草やエビも少しずつ回復傾向で、ヒメマスの漁獲量も増えており、確かな効果を感じさせてくれます。

これからの「ヒメマス」の復活、十和田湖の再生の取り組みに注目したいところです。



最盛期には、たくさんの「ヒメマス」が湖からこの遡上路をのぼって遡上池に遡上します。